

2022年1月16日 降誕節第4主日礼拝

メッセージ「サケがない」

岡嶋千宙伝道師

聖書 ヨハネによる福音書 2章1-11節

新しい年が始まって、通例なら、「願い事・抱負を」と言いたくなるところですが、このご時世、それすらも相応しくないとも思えてきます。その原因は、やはりコロナウイルス。今年もウイルス感染による影響は避けられないようです。昨年夏の感染拡大の「第5派」が収まってから、いったんは落ち着き、経済も回復の兆しが見えてきていましたが、新しい変異株オミクロンの影響で、年末以降、感染が爆発的に拡大しています。日本で初めて感染が確認されてから、すでに丸2年が経過しています。三年目の今、閉塞感が社会に満ちているように感じるのはわたしだけではないでしょう。出口が見いだせない状況で、願い事をするこすら難しくなっている。願っても叶うはずがない。願っても無駄。あきらめたくもなります。

でも、捨てきれない。希望を失いたくない。できるなら、よりよい社会、住みやすい社会、コロナ禍であっても、人々が喜びを忘れずに生きられる社会にしたい。だからモヤモヤします。そして、その解消できないモヤモヤをどこかにぶつけたくなります。「政治家が悪い!」「政府が悪い!」「夜の街の人たちが悪い!」「数パーセントしかいない金持ち層が悪い!」誰かに責任を押し付けたくくなります。押し付けられる側も反発し、亀裂が生まれます。争いが生まれます。亀裂は格差につながり、社会が二極化していきます。昨年メディアでよく使われていた「分断」という言葉。社会の至るところで「分断」が生まれています。ギクシャクした社会。生きづらさがはびこる世の中。閉塞感にあるこの状況を打破したい。解決策そのものとはまでは言えないかもしれませんが、閉塞感を打破するためのヒントを見いだすために、みなさんとともに聖書の御言葉に触れてみたいと思います。与えられているのは「ヨハネ福音書」2章1-11節。聖書に親しみのある人ならば良く知っている物語。イエスの奇跡を描いた記述のひとつ、カナの婚礼の物語です。注目するのはイエスではなく、別の人物、「イエスの母」。

2章1節「ガリラヤのカナで婚礼があって、イエスの母がそこにいた」。続く2節「イエスとその弟子たちも婚礼に招かれた」。二つの節を比べて気づきます。「イエスの母」は「そこにいた」。他方で、「イエスとその弟子たち」は「招かれた」。二つの表現の違いからすると、「イエスの母」は、はじめから婚礼の場にいたことが推測されます。さらに、5節で、イエスの母は「召し使いたちに」話しかけ、イエスの言うことを聞くようにと言いつけています。婚礼の場で、使いの者たちに命じることのできる立ち位置にあった人ということになります。つまり、「イエスの母」といわれる人物は、婚礼を主催する側の人間、ホスト側の人間であったことが分かるのです。

当時の結婚式において、ゲストを招いてもてなすことは主催、ホストの責任とされてきました。ゼクシィなど、結婚斡旋業があったわけではありません。会場設営から食事の手配まで、すべて、ホストがしなければなりません。食事に関しては、婚礼の儀式は数日に渡って行われるのですが、その間、列席する人たちに食べ物と飲み物が行き渡るように、必要な量を確保しなければなりません。それが当然で、途中でなくなるということは、ホストにとって不名誉なこと。だから、周到に準備をする。「もしも」のさらにその先の「もしも」のことを考えて、十分な食事とお酒とを準備しておく。

なのに。酒がない！宴席の終盤であったのならまだよかったです。「これでお開き」ということもできたのですが、文脈からすると、終盤ではなく中盤、なんなら始まって間もなくのことだったようです。ホストはあせり出します。ゲストを失望させてしまう。それだけではありません。途中で酒がなくなるということは、そこで宴自体を終わらせなければならない、ということ。主催する側としては、何としてでも避けたい。個人ではなく家族単位でものごとが進められていく社会です。婚礼を取り仕切るのは、新婦と新郎の家族であり、本来なら数日続くはずの婚礼の儀式を半ばで終わらせる、というのは、その家族全体にとって不名誉となります。あるいは、この失態のゆえに、家族全体が、共同体のなかで排斥されてしまうという恐れもあったことでしょう。ゲストたちも薄々感じていたのかもしれませんが。「まわってくる酒の量が少なくなっているなあ。そろそろ、潮時かな。酒がないなら、ここにいても仕方ない。しらけてきた、帰ろうか」と。その状況で動いたのが、イエスの母です。彼女はイエスに近づき一言「ぶどう酒がありません」と伝えます。イエスの答えはなんともそっけなく、無愛想。ですが、彼女はあきらめません。何かが起こることを願い、そうなることを信じ、召し使いたちに、「イエスが言うことを行ってほしい」と伝えます。その思いが伝わったのか、最終的にはイエスも重い腰をあげ、なくなったはずの酒が再び用意され、婚礼の宴は継続されることになりました。

通常、この場面は、イエスの奇跡の物語とされます。イエスが水をぶどう酒に変えた。しかも絶品の美酒で、量もかなりのもの。「さすが神の子、救い主、イエスさま」と。確かに、イエスの関わりがあったことが明記されています。でも、イエスの関わりはごくわずかです。イエスが関わる前を見れば、「おやっ？」と言いたくなります。もし、イエスの母がいなかったら。彼女の「酒がない」という一言がなければ、いや、そもそも、彼女がイエスに近づく一歩を踏み出さなければ、どうなっていたのだろう。イエスが水を酒に変えるということすらなかったはず。だとすると、真の立役者は、イエスの母なのではないか。となると、今度は、イエスの母の信仰がすごいということになりそうです。ここまであえて言いませんでしたが、教会で「イエスの母」とい

うと、当然にマリアのこと。「ルカ福音書」には、マリアの信仰を正面から称えるような記述がなされていることもあり、イエスと並んでマリアを崇拝するような流れにいきかけるところですが、ぐっと踏み留まります。

「ヨハネ福音書」では、この「イエスの母」という人物は個人名で呼ばれることは決してありません。常に「イエスの母」として登場します。そして、着目すべきは、イエスが母を呼ぶときの言葉です。ヨハネ福音書において、イエスは彼女を「マリア」とも、「母」とも呼びません。2章4節「女よ」。「母」ではなく、母を含めた一般的な女性を表す言葉。まるでイエスと母との間に、血縁関係などないように捉えられる言い方。さらに、そのあと、イエスはその「女」に向かって、「私とどんな関わりがあるのですか」と言い放ちます。表面的には、ここでのイエスの言葉は、婚礼の席で酒がなくなったことは自分には関係ないことだ、と伝えているようにも聞こえます。ですが、ここで「何が」関わりがあるのかが言われていないことからすると、別の推測が可能です。そして、「女よ」という言い方とあわせて考えると、イエスの母とイエスとの関係性を問う言葉として聞こえてきます。イエスは、イエスの母に対して、どういう意図で、どういう動機で、自分に「酒がない」ということを伝えたのかを問おうとしたのではないのでしょうか。あるいはもっと踏み込めば、「酒がないという状況をどうにかしたい、どうにかして酒をもう一度提供できるようにしたい」、という願いを、なぜ自分に伝えたのか。伝える状況にいたるまでに彼女を突き動かしたものは何だったのかを問うたのではないのでしょうか。そうであれば、その問いが発せられたのは、イエスと関係を持つことの広がり伝えるためだった、と理解することができます。イエスと関わりを持つということは、この世的な血縁関係を築くことではない。家族である必要はなく、いやむしろ血縁関係のないところで、家族ではないところだからこそ、紡がれる関係がある。それが、イエスと関わることなのだ。先月のクリスマス礼拝で聞いた御言葉が思い出されます。イエスを受け入れ、イエスを信じる人は、「血によってではなく、肉によってではなく、人の欲によってでもなく、神によって生まれ」、神の子となる(ヨハネ福音書1章12-13節)。

ひょっとしたら、イエス自身は何もしなかったのかもしれない。召し使いたちに「水がめいっぱい水をいれなさい」と命じてはいますが、それ以外には何もしなかったのかもしれない。対極的に目立つのは、イエスの母の存在感です。イエスからのそっけない応答を受けたあと、召し使いたちに命じたイエスの母は、イエスに伝えたのと同じように、婚礼の席に居合わせた別の人たちにも、「ぶどう酒がありません」と伝え回っていたのかもしれない。想像してみてください。結婚式でなくてもいいです。祝いの席、喜びに溢れる場、昔懐かしの人に再会し、新しい出会いにワクワクしている。そんな場で、食べ物が足りない、飲み物が足りない。もちろ

ん、ないならないなりになんとかなるのかもしれないけれど、どうせなら、もっと喜びを共有したいじゃないですか。先月のクリスマス礼拝後のあの一時は、あの食事があったからの喜びの場だったと、わたしは実感しています。「この祝い場と時間を途中で終わらせたくない、みなをもっと喜ばせたい」そんな思いをもって、一人ひとりに近づき、自分の思いを伝える人の姿を見たのなら。自分もその思いを現実のものにするために、何かをしたいと思うのではないのでしょうか。そして、イエスの母に「ぶどう酒がない」と言われた人たちは、それぞれが、その状況で調達できるだけのぶどう酒を集めてきたということは十分に考えられます。一人がもってくる量はわずかであっても、それをあわせたら、水がめいっぱいぶどう酒になっていた。名前も記されていない一人の女性の思いが、みなを動かした。人々の間に、繋がりがもたらされ、喜びの場が継続させられた。イエスの母ばかりに着目してきましたが、では、イエスはどうなのか、イエスがその場に居合わせた意味はあるのかと疑問に思われるかもしれません。正解は分かりません。わたしなりに思うのは、イエスの母を、もう一歩先の行動へと促すことに、イエスの存在意義があったということです。イエスの母から始められる関係の輪が、さらなる広がりを持つように、イエスは道を整えようとした。誰かひとり、例えばイエス自身や、彼の母、あるいは弟子などの著名な人物によって成り立つ奇跡ではなく、イエスと関わりのある一人ひとりが繋がり合うことで生まれる奇跡がありうることを示した。

「イエスの母」。他の福音書では「マリア」と呼ばれながらも、「ヨハネ福音書」では名無しのままでいるもう一つの理由。それは、この言葉に触れるわたしたち一人ひとりを招き入れること。「イエスの母」。それは、今、この瞬間に、この言葉にふれているわたしたち、一人ひとりです。彼女と同じように、わたしたちもまた、イエスに問われています。「私とどんな関わりがあるのです」。そして、「その関わりの中かで、あなたはどう生きるのか」、と。生きていて直面する様々な困難や試練、あるいは自分自身や自分を取り囲む状況の限界に対して、あきらめて誰かのせいにするのか。「イエス」、「神」、「教会」のせいにして、人々の間の亀裂を大きくするのか。それとも、あきらめずに、自ら動いて、動いた先で出会う人たちとの関係の輪を広げて、不確定でも望む世界へと続く道を歩み出すのか。閉塞感のある世の中で、うちひしがれることもあるでしょう。もう動けない。希望すら持てない、願うことも無理。そう思うときがあってもおかしくはないのでしょうか。ですが、イエスと出会い、イエスとの関わりの中に入れられ、イエスに問われているわたしたちは、そこからまた新しい一歩を踏み出すように促されているのです。名乗られることのなかった女性、「イエスの母」のように。まずは今日からはじまる一週間、その一歩を踏み出せるよう、互いに心の手を取り合い、イエスを真ん中に据えて、過ごして参りましょう。